

## 1 番組紹介

「こころの歌」は「帰ってきた歌謡曲」の後番組として、昭和49年4月から9月までの半年間、日本テレビ系列にて毎週木曜夜10時30分から55分まで放送された。番組の制作局は「帰ってきた歌謡曲」に引き続き読売テレビであり、構成も「帰ってきた歌謡曲」と同じ尼子成夫が務めていた。

## 2 放送局

『週刊明星』昭和49年4月14日号の番組広告によると、読売テレビ（近畿広域圏）の他、日本テレビ（関東広域圏）、中京テレビ（中京広域圏）、札幌テレビ（北海道）、福岡放送（福岡県）、西日本放送（香川県・岡山県）、日本海テレビ（鳥取県・島根県）、青森放送（青森県）がネット局であった。

その他、山口放送（山口県）が同じ曜日・時間帯に14週遅れで放送していたことも当時の新聞紙面から確認できた。他にも放送していた地域が少なからず存在していたと思われる。

## 3 出演者

司会は当時作曲家として活躍していた平尾昌晃が務めた。また、司会を務めるだけでなく、番組のテーマソング「愛ある人生」とラストテーマ「恋人の子守唄」を作曲し、毎週の番組内の冒頭とラストで歌っていた。平尾はデビューまもない昭和30年代前半はロカビリー三人男として人気を博していた歌手であったが、番組開始の昭和40年代後半当時は歌手として活動することが少なく、「平尾昌晃さんて、歌も歌えるんですか」という問い合わせがハイティーンから届いたというエピソードが紹介されている（昭和49年5月23日付中日新聞夕刊）。

また、「ピンキーとキラーズ」のメンバーであったエンディ山口とルイス高野が、平尾の愛弟子のけい子をボーカルに迎えて結成したグループ、「けい子とエンディ・ルイス」がレギュラー出演し、後述する「今月の歌」を歌っていた。

ゲスト出演者は、毎週一人（組）または二人のみであった。

## 4 番組の流れ

毎週の番組の流れは以下の通りであった。

- ①番組テーマソング「愛ある人生」を平尾がステージで独唱
- ②ゲスト出演者を迎え、平尾とのトークや歌の披露
- ③「今月の歌」を、レギュラー出演のけい子とエンディ・ルイスがステージで歌唱
- ④番組ラストテーマ「恋人の子守唄」を平尾がステージで独唱

## 5 番組主題歌

番組主題歌の「愛ある人生」と「恋人の子守唄」は好評で、視聴者から「レコードはいつ発売？」の問い合わせが殺到した。そこで、気をよくした平尾はこの2曲をレコーディングした（昭和49年7月25日付朝日新聞東京版夕刊）。

同年7月にキャニオン・レコードから発売されたこのシングル盤は、現在でもネットオー

クッション/フリマサイトで見かける。



## 6 今月の歌

毎月視聴者から歌詞を募集して優秀な作品に平尾が曲をつけ、けい子とエンディ・ルイスが歌う「今月の歌」のコーナーがあった。

『週刊明星』昭和49年4月14日号には、6月の放送分として「おもいで」をテーマに四百字詰原稿用紙一枚に一編を書き、4月末日までに番組宛に郵送してほしい旨の記事・広告が掲載されている。優秀作品は1か月間このコーナーで歌われ、採用者には記念品が贈呈された。

この6月の放送分においては、応募が3,126編も殺到してスタッフが整理や選考にてんでこまいとなった。「おもいで」というロマンチックなテーマだけに初恋、失恋、片思い、ふるさとなど内容も多彩で、20～30代の主婦の応募が目立った。選ばれたのは、京都市伏見区の主婦・多田和子さん(33)の「木屋町旅情」であった(昭和49年6月15日付KNB(北日本放送)社報/昭和49年6月6日付毎日新聞東京版夕刊)。

この他、5月の放送分では、藤沢市立片瀬小学校の愛唱歌にもなった「片瀬のうた」が、9月の放送分では、東京都目黒区の主婦・玉木みえさんの「ひとりごと」がそれぞれ歌われた。

## 7 当時の紹介記事

「大人の歌謡ファン注目！本格派の歌番組が登場」の見出しによる前掲『週刊明星』昭和49年4月14日号の記事では、この番組の趣旨が以下のように詳しく紹介されている。

いまや、テレビでは圧倒的な人気を誇る歌謡番組だが、その内容はというと、ほとんどがいわゆるヤング向け。

しみじみと、歌そのものを聴きたいと願う大人向けの本格派歌謡番組は意外と数が少ない。

そこで、この疎外された？大人の視聴者に、本物の歌を楽しんでいただこうと、4月4日から始るのが、日本テレビの『こころの歌』(木曜後10・30～10:55)だ。

司会は、『霧の摩周湖』や、今年の『夜空』で名実ともに一流の作曲家の位置を得た、平尾昌晃。

彼のナウなセンスで番組をリードしてもらい、20代から30代の大人の鑑賞に耐え得るような感動を呼ぶ歌を、テーマ別に、歌唱力抜群の人気歌手によって伝えてゆこうとしている。

レパートリーも、そういう意味から、ヒット曲ばかりではなく、民謡、童唄、労働歌と多彩。

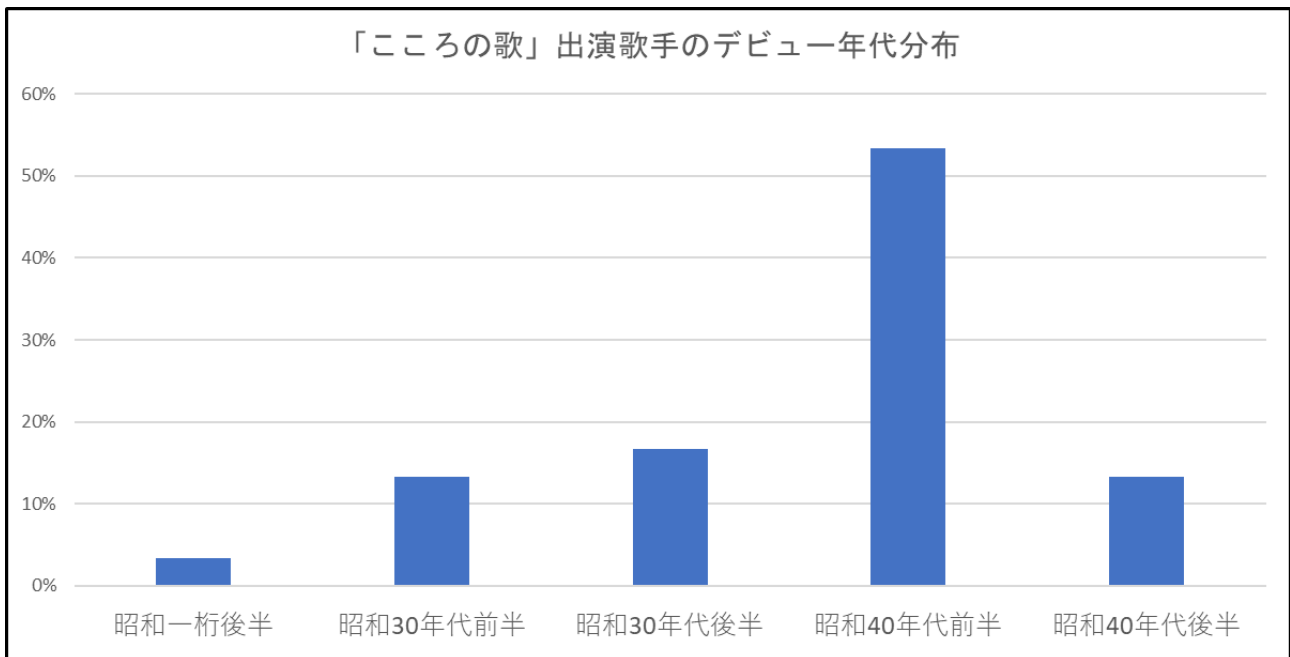
「ぼくの作曲の理念は、日本人の心に訴えるもの。ですから、この番組の企画は自分の気持ちにぴったりきますし、なんとか長つづきするものにしてみたい」

(後略)

また、「ユニークな歌番組」と評している記事も複数存在する(『週刊平凡』昭和49年4月18日号/同年6月13日号)。

## 8 出演歌手のデビュー年代

ゲスト出演歌手のデビュー年代を以下にグラフに示した。



「大人向けの歌謡番組」ではあるが、放送時点でデビュー10年未満（昭和40年代デビュー）の歌手が全体の67%を占めていたことが分かる。前番組の[「帰ってきた歌謡曲」は昭和40年代デビューの歌手がわずか7%であった](#)ことを考えると、大きな隔りがある。[昭和40年代以降デビューの歌手が33%であった「にっぽんの歌」と比較してもその割合は倍であるが、「にっぽんの歌」の場合は期間が下るにつれて若手の出演比率が顕著に増えており、具体的には第266回～291回（昭和52年4月～9月）が60%、第292回～317回（昭和52年10月～53年3月）は77%であったため、「にっぽんの歌」の終盤期と同程度であったと言える。](#)

## 9 まとめ

筆者は令和8年4月、番組構成を務めていた尼子成夫氏に対し、「こころの歌」は「帰ってきた歌謡曲」の内容を引き継ぐ要素があったのかどうか電子メールにて質問したが、全く関係ないという回答であった。尼子氏は「帰ってきた歌謡曲」以外にも当時複数の歌番組の構成を引き受けていたため、引き続き読売テレビから声がかかったに過ぎないとのことであった。

一方で、“日本人の心の歌”を連想する番組名である点や、「大人向けの本格派歌謡番組」である点は、「にっぽんの歌」（NETテレビ（後にテレビ朝日））や「心で歌う50年」（東京12チャンネル）と共通していると言える。

ゲスト出演者が毎週一人（組）または二人のみである点など、「帰ってきた歌謡曲」との相違は明らかであり連続性はないと言えるが、徐々になつメロの概念が拡大していった昭和40年代末の状況を体現した番組であったとは言えるのではないかと。